

「平成」の都市の移り変わり

一橋大学大学院法学研究科 准教授 阿部 辰雄

「平成」の30年間の終わりを告げ、もう丸3年が過ぎました。少しずつ「令和」が当たり前になってきている中で、「平成」も過去のものになりつつあります。私は昭和の終わりに生まれましたので「平成」がこれまでの人生のほぼすべてです。青森の片田舎に生まれ、進学・就職の過程で仙台・東京と都会をだんだんと経験し、就職後は福井・奈良と、2つの大事なふるさとができました。どの都市にもたくさんの思い出がありますが、時を経て訪れると、どこかしら違った雰囲気を感じることもしばしばです。30年とはそのような時間なのだなあとしみじみ思います。

さて、今回ご紹介する『平成都市計画史』（饗庭伸／著、花伝社、2,750円）は、そんな都市の変化を平成の30年間で切り取って眺めていくものです。都市計画をはじめとして、都市を形づくる様々な制度に着目し平成の30年間



『平成都市計画史』
饗庭伸／著 花伝社

を振り返る内容となっています。特定のテーマごとに身近な事件や社会情勢の変化とそれに伴う制度変更をバランスよく説明してくれており、実際の都市の写真も多く用意されているため、日ごろ都市政策になじみのない方にもストンと胸に落ちる内容になっています。

本書でまとめられている各テーマを読むにつれ、平成というのは短いながらも本当にい

ろんなことがあったと痛感させられます。バブル絶頂から崩壊を経て、経済の再生に力を注ぐ一方で、地方都市の中心市街地の地盤沈下の問題や頻発する大規模災害にも直面してきました。それぞれが都市のあり方・制度に大きな影響を与えてきたのです。そういう視点をもって都市を眺めると、同時期にできたエリアはなんとなく見分けがつかず、それだけこの平成の期間に事件が起き、制度が移り変わってきたということなのかもしれません。

著者は、現在の都市を鳥瞰した時に見える風景は「住宅地、商業地、工業地、農地の4つの空間と自然がせめぎあいながら作り出した風景」と表現しています。都市は都市計画だけで決められるものではなく、様々な要素が複雑に絡み合っていて、まるで生き物のように変化していくことを端的に表している言葉だと思います。平成期に人口の頂点を経験した私たちは、今後人口減少の新たな局面に対処していく必要があります。たくさんのせめぎあいの中生まれた都市を、どう新たな状況にアジャストさせていくのか。難しい課題ですが、これに真正面から取り組んでいける仕事に関われることにワクワクしてくる課題でもあります。